

創世記44章32－33章 「私の保証人」

1A ユダに働くキリストの御靈

- 1B 弟を売ったことへの悔恨
- 2B 父への愛
- 3B 保証人

2A 契約の保証

- 1B 仲介の働き
- 2B 執り成し
- 1C 憐れみへの訴え
- 2C 地の塩
- 3B 代償
- 4B 身代わり

3A 保証への応答

本文

創世記 44 章を開いてください。聖書通読の学びは、42 章まで来ていましたが、午後に 43-44 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、44 章 32-33 節に注目します。「**“というのは、このしもべは父に、『もしも、あの子をお父さんのもとに連れ帰らなかったなら、私は一生あなたの前に罪ある者となります』**」と言って、あの子の保証人となっているからです。ですから、どうか今、このしもべを、あの子の代わりに、あなた様の奴隸としてとどめ、あの子を兄弟たちと一緒に帰させてください。」これは、ユダが弟ベニヤミンの身代わりに自分が奴隸となりますと言っている場面です。

1A ユダに働くキリストの御靈

私たちは、ヨセフの生涯が、キリストのことを指し示す証になっていることを学んでいます。彼が兄弟たちに裏切られて、奴隸に売られたように、主はユダヤ人の指導者らによって売られて、捕えられました。しかしヨセフはその苦しみを経て、エジプトの宰相となるという栄光に預かりました。主イエスも苦しみを経てよみがえり、天に昇られ、父なる神の右の座におられます。それは、キリストの御靈が働いておられ、導かれていたからこそ、証になっていました。

1B 弟を売ったことへの悔恨

ユダの生涯にもキリストが証されます。しかし、彼の証は、悔い改めた後からです。彼は、弟ヨセフを売った張本人です。(37:26-27)

しかし、彼に悔い改める転機が来ます。彼はカナン人の妻を娶り、息子たちが生まれましたが、

主の怒りを買って死にます。イスラエルの子孫を残すという御心に反したからです。そして三人目の息子には、嫁タマルを与えませんでした。それでタマルは遊女のふりをして、ユダと寝ます。それで子を宿すのですが、ユダは激しく怒り、彼女を火で焼けと言います。しかしタマルは、ユダと寝たことを示す印を見せました。それで、彼女は自分よりも正しいと言ったのです。イスラエルの子孫を残すという御心に自分自身が逆らったことを知って、悔い改めたのです。

2B 父への愛

そしてユダは、他の兄弟たちと共に、ヨセフについて、獣に噛み裂かれたと偽りました。それから、父は、悲しみから立ち直れていなかったのです。ベニヤミンを絶対にエジプトに連れて行かせないとしていました。けれどもユダが説得して、父イスラエルは、全てを任せました。けれども今、ベニヤミンの穀物の袋の中にヨセフの銀の杯が入っていたのです。ヨセフは、罪を犯した者だけが奴隸になれば良いとしました。

ユダは、二度と父にこれ以上の苦しみを味わわせたくないと思いました。ヨセフのみならず、父にも罪を犯したことを悔い、また父を愛していました。「あの子がいないを見たら、父は死んでしまうでしょう。しもべどもは、あなた様のしもべである白髪頭の父を、悲しみながらよみに下らせることになります。(44:31)」

ここで、ユダにキリストの証しがあります。私たちの主は、ご自分の父を愛し、その御心を行うことが全ての喜びでした。この方と御父は、一つとまでなっており、それだけ御心に完全に従っていました。ゲッセマネの園での祈りがそれを物語っていますね。「マルコ 14:36 アバ、父よ、あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。」

3B 保証人

そしてユダは、父に対して自分が保証人なると申し出たのです。「私自身があの子の保証人となります。私が責任を負います。もしも、お父さんのもとに連れ帰らず、あなたの前にあの子を立てなかつたら、私は一生あなたの前に罪ある者となります。(43:9)」ここがユダのキリストの証しの真骨頂です。ベニヤミンに何かが起こつたら、自分が保証人になります。私たちの主イエスは、新しい契約の保証となりました。「その分、イエスは、もっとすぐれた契約の保証となられたのです。(ヘブル 7:22)」

2A 契約の保証

この契約の保証ということについて考えていきたいと思います。保証とか保証人と言えば、私たちになじみがあるのは、不動産ですね。保証人の中でも最も責任が重いのは、連帯保証人です。

不動産を仲介として、家主が借主と契約を結びます。その違反を借主が犯せば、連帯保証人に借主に対するのと全く同じように損害を請求できます。大抵、その親が連帯保証をしますね。連帯保証人には、軽々しくなってはいけないと、よく教えられました。そのことが、神との関係においても、必要になってくるというのが、聖書の教えです。

1B 仲介の働き

まず、仲介者が必要です。人と人の付き合いにおいて、誰かに直接話すのではなく、責任の伴う内容では、仲介をする存在が必要ですね。

兄弟たちがヨセフのところに来た時、いきなり彼の家に連れて行かれました。彼らは、前回来た時、自分たちの穀物の袋に支払ったはずの銀貨が入っていたので、何か咎められるのでは？と恐れていきました。それで、彼らはヨセフに直接話すのではなく、その管理人に話したのです。自分たちの事情を話し、その銀貨と今回購入する代金も加えて用意したと告げています。そしてその管理人は、前回の分は、神が備えたとヨセフに代わって話しています。こうやって仲を取り持つのが仲介人であり、必要な存在です。

そしてヨブ記には、ヨブが保証人を立ててほしいと、神に願い出ている場面が出てきます。「17:3 どうか、私を保証してくれる人をあなたのそばに置いてください。ほかにだれか誓ってくれる人がいるでしょうか。」ヨブは、自分が苦しみと痛みの中にあり、そこで全能者である神がそのすべてに御手を置かれていると感じて、自分と神との間に保証人を置いてくださいとお願いしています。自分が神に訴えようにも、圧倒的な差があり、その間を取り持つ人がいなければ、聞き届けられないと感じていたのです。

私たちにも、そんなことを感じないでしょうか？神が天におられて、自分が地上にいる。その間を取り持つ方がいなければ、どのようにして神とつながり、また神と話すことができるのだろうか？と思います。だから、その間を取り持つ仲介者が必要です。イエス・キリストが、その仲介者になつてくださいました。「**I テモ 2:5 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。**」

2B 執り成し

1C 懐れみへの訴え

その仲介の働きの中で、圧倒的に一方が他方に不利な時があります。ユダの場合は、ベニヤミンの穀物の袋の中に、ヨセフの銀の杯が入っていたのです。物証があるのですから、何ら弁解の余地はありません。そのような時に、どのように間に立つ人は、仲介を取り持つのでしょうか？それを、「執り成し」と言います。基本、「どうか、懐れんでください」という切実な嘆願を立てることができます。相手が、罰することは当然であるけれども、懐れんでそれを行わないように頼み込むことです。

ですから、相手の憐れみや寛容を引き出すように、説得していきます。

イエスが、ユダヤ人たちのために、必至になって執り成している思いを、譬えを用いて話している場面があります。「ルカ 13:6-9 ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。そして、実を探しに来たが、見つからなかった。7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年間、このいちじくの木に実を探しに来ているが、見つからない。だから、切り倒してしまいなさい。何のために土地まで無駄にしているのか。』8 番人は答えた。『ご主人様、どうか、今年もう一年そのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥料をやってみます。9 それで来年、実を結べばよいでしょう。それでもだめなら、切り倒してください。』」

これは、ユダヤ人たちがいつまで経っても、悔い改めないことに対して、神の御怒りが今にも下ることを警告したものです。イエスの公生涯が終わりに近づいています。終わりに来ているのに、未だ心が鈍いままで。それが、三年間、いちじくの木に実が結ばれていないことで喻えています。けれども、もう一年、待ってほしいと懇願しています。こちらで、もっと努力してみる、肥料を与えてみます。来年まで待って、それで切り倒しても遅くないでしょうということを訴えています。これは、イエスが、さらにユダヤ人たちに働きかけるので、もう少しお待ちくださいという、執り成しをしているお姿なのです。

2C 地の塩

主は、この世を正しく裁かれます。正しく裁くことを前もって宣言されます。しかし、もし、嘆願する人、執り成す人が出てくるとどうなるでしょうか？ヤコブは手紙の中で、こう言いました。「2:13b あわれみがさばきに対して勝ち誇るのです。」したがって、主が、これこれの裁きを行うと言われて、人が御前に出てきて、執り成して行く時に、その裁きを主が遅らせることができます。また思い直されことさえあるのです。

アブラハムが、ロトのゆえに執り成したことを思い出してください。ソドムを滅ぼすと宣言された主に対して、アブラハムは正しい人と共に滅ばされるのですか？と訴えました。そして、五十人の正しい人がいたら？と問いかけ、ついに十人にまで人数を減らしました。主は、それであっても町全体を赦すと宣言されたのです。それでも、ソドムには十人の正しい人たちもいませんでした。それで、御使いたちが来て滅ぼすのですが、彼らはロトたちがソドムから出て行くまで、何もすることができますと言っています。ためらうロトを忍耐して待っています。それで彼と娘たちが出て行った時に、火と硫黄が町に降り注がれました。

ユダのヨシヤ王のことも思い出します。彼は、律法を読み、衣を裂きました。自分たちが、主に背いて、御怒りが下るのは必至だったのを知ったからです。それで、女預言者フルダが、こう宣言しています。「II列王 22:19-20 あなたは、わたしがこの場所とその住民について、これは恐怖のも

ととなり、ののしりの的となると告げたのを聞いた。そのとき、あなたは心を痛めて【主】の前にへりくだり、自分の衣を引き裂いてわたしの前で泣いたので、わたしもまた、あなたの願いを聞き入れる——【主】のことば——。20 それゆえ、見よ、わたしはあなたを先祖たちのもとに集める。あなたは平安のうちに自分の墓に集められる。あなたは自分の目で、わたしがこの場所にもたらす、すべてのわざわいを見ることはない。』」へりくだって、悔い改めたので、主は、ヨシヤが生きているうちは、まだ災いを下さないと決められたのです。

そして、主を恐れて、主に願ったので、下すと言われた災いを思い直される場面さえ出てきます。「エレ 26:18-19 かつてモレシェテ人ミカも、ユダの王ヒゼキヤの時代に預言して、ユダの民全体にこう語ったことがある。万軍の【主】はこう言われる。シオンは畠のように耕され、エルサレムは瓦礫の山となり、神殿の山は木々におおわれた丘となる。19 そのとき、ユダの王ヒゼキヤとユダのすべては彼を殺しただろうか。ヒゼキヤが【主】を恐れ、【主】に願ったので、【主】も彼らに語ったわざわいを思い直されたではないか。」エルサレムが滅びると、ミカが預言した時、ヒゼキヤ王もユダの民も悔い改めて祈ったので、思い直されました。

異邦人でさえ、悔い改めて祈った時に、主は思い直されています。ヨナが、「3:4 あと四十日すると、ニネベは滅びる。」と預言しました。ところが、王を始め、民も、粗布をまとめて、灰の上に座り、断食を布告して、ひたすら祈りました。その悔い改めの姿を見て、主は思い直されたのです。

このように、主は憐れみ深い方です。正しい方ですが、憐れみに満ちておられます。そこで、自分自身がへりくだり、神が正しい方であることを認め、悔い改める祈りを献げている中で、主は、初めに語られたことを行われないことがあるのです。

それは、「破れ口に立つ」とも呼ばれます。「エゼ 22:30 この地を滅ぼすことがないように、わたしは、この地のために、わたしの前で石垣を築き、破れ口に立つ者を彼らの間に探し求めたが、見つからなかった。」主は、前もって語られます。終わりの日について、主が言われたことは、主ご自身が決して願わないことです。不法や罪がはびこり、信者が憎まれるようになり、また、荒らす忌まわしい者が現れ、選ばれた者たち、すなわちユダヤ人を迫害すること。そして、天変地異が起こり、人々の恐怖に満たされること。これらのことが、起こってほしいなど、決して思っていません。人々の罪の結果として起こることを、前もって告げておられるだけで、それを喜びにしています。

そこで、破れ口に立つのです。主の前に出てきて、執り成します。その中で、主の心が、憐れみでわななき、それで行われることを遅らせることがあるのです。イエスは、このことを「地の塩」と呼ばされました。塩は、防腐剤です。腐敗が進むのを、遅らせる働きをします。確かに世は、悪くなっていくのですが、その中に、主の憐れみを願って、立ちはだかるのです。

3B 代償

そして、その執り成しは、代償と言う形で現れるのです。これが、保証になっていきます。相手に憐れみを請うのですが、その憐れみを確かなものにするために、自分自身が償いをしますと申し出るのです。

パウロが、コロサイにある教会の長老ピレモンに対して、かつて自分のもとを逃げた奴隸オネシモが、回心して、今やパウロの同労者になっていることについて、パウロが執り成しの手紙を書きました。それがピレモンへの手紙です。そこで、オネシモがかつてもたらした損害を、「私が償います」と書いています(19 節)。請求は私にしてください、と言っています。それが、ユダが父ヤコブに、ベニヤミンに何かが起こった時に、自分が保証人になると言った理由です。自分が代わりに責任を取ることによって、ベニヤミンのしたことを赦してもらうのです。

パウロが、第二コリントでこう書いています。「5:19 すなわち、神はキリストにあって、この世をご自分と和解させ、背きの責任を人々に負わせず、和解のことばを私たちに委ねられました。」そして、こう言います。「5:21 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあって神の義となるためです。」私たちが罪人なのに、この方が罪人とされました。そして、キリストが義であられるのに、私たちが義とみなされたのです。それは、ご自分が、私たちの罪の代償を負われたからです。

私は、実はこのことがなかなか受け入れられませんでした。自分が罪人で、死ななければいけないことはわかる。そのために、イエスが十字架で死なれたことも分かる。けれども、多大な迷惑をかけてしまったと思はしても、そこにある動機を知った時に、初めて悔い改めることができました。それは、神が私を愛しておられて、イエスご自身も愛されて、それで自ら進んで十字架の道を進まれたということです。ここに愛があるのです。迷惑なんかじゃないのです、それでよいのだとして、代わりに犠牲を払われたのです。

4B 身代わり

そして、その保証の究極は、自らのいのちを代償としたことです。何か多額の金をつき込むのでもなく、自分の息子を犠牲にするのではなく、自分自身の身を、奴隸にしてくださいと、ユダは申し出ました。これこそが、最も大きな支払代金です。「マル 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与るために来たのです。」人のいのちほどに高価なものはないですね。自分自身を差し出すところに、まことの対価があります。それを、主ご自身の行われた保証でした。

3A 保証への応答

私たちは、ここまで犠牲に、どのように応答するのでしょうか？いのちを献げて犠牲を払ってく

ださり、それで私たちは罪の縛目から解放されました。その自由な身となった私たちは、同じように、自分自身を神に差し出して、その愛に応答します。「ロマ 12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」

自分自身のからだを献げるのです。そのまま、主の前に持つて来ることです。愛がこれだけイ大なので、その応答も全面的な献身であります。まだ、その決断をしていない方は、ぜひ応答してください。キリストの愛を知りたいのであれば、そのまま応答してみてください。